

レッツボウサイプロジェクト～地域防災ラボラトリー～

特定非営利活動法人防災コミュニティネットワーク

理事長 増村一樹

背景

当団体は、防災をとおしたコミュニティの形成と、そのネットワークの構築をビジョンに掲げている。今回の地域共生アイデアにおいても、そのビジョンのもと地域住民共通の課題である災害に対する備え防災をテーマに地域共生の実現を目指す。

新型コロナウイルスの影響により、地域コミュニティの希薄化は一気に進んだ。お祭りに代表されるような地域における様々な催事は中止に追い込まれ、防災活動も例外ではなかった。そのため地域力は低下し災害に対する地域住民の不安は増している。

そこで、当団体が運営しているコミュニティスペース・アットコミュニケーションにおいて防災をとおしたコミュニティの形成を目指す。

課題

ここで課題を整理すると、

- ①地域コミュニティの希薄化
- ②防災活動の未実施
- ③既存の防災活動システムのマンネリ化、仕組みの改善

住民活動のプラットフォームのイメージ

テーマ：防災をとおした地域共生の居場所を確立する。

①防災をテーマにした PF の形成

杉並区防災課、区民生活部地域課、杉並区社会福祉協議会、すぎなみ協働プラザ、地域包括支援センターとは連携済み。今後、より強固な連携が可能となるように役割を明確にしていく。

②課題の共有～住民の意見確定～意欲喚起

住民フォーラム（リスクコミュニケーション会議）、懇談会などで住民意思の確定をさせる。

③解決方法の協議と確定

防災をとおしたコミュニティ形成のために、コミュニティスペース・アットコミュニケーションを使用し、「地域防災ラボラトリー」を立ち上げる。

「地域防災ラボラトリー」の中身としては、月に2回程度のリスクコミュニケーションをとおした地域防災講座を開催、定期的に当団体が開催しているボウサイウォーク（街歩き）なども絡めながら防災の意識と知識を高め、地域住民同士顔の見える場として運営し課題の解決にあたる。

運営者は、当団体を軸に地域の防災会メンバー、防災に興味のある地域住民でスタートする。行政の支援方法に関しては、既に①で挙げられている団体に引き続き支援を要請する。具体的には、賞味期限が近くなった非常食の提供や、防災イベントを開催できる場所、特に区管理の公園等を借りやすくしてもらい、地域住民に対して防災ワークショップを開催する。

④実施戦略の策定（特に住民の役割）

場所は、前述した、コミュニティスペース・アットコミュニケーションを使用する。運営協力者は、防災会、防災に興味のある地域住民で行う。参加者に関しては、社会福祉協議会、地域包括支援センターと連携するとともに、すでに地域で当団体の活動を支援して下さっている個人・団体にも改めて協力の要請を行う。資金に関しては、区の委託事業となるように仕組みを水平展開できるように確立させるとともに、広く地域住民の理解を得て寄付等による拠出を考えている。

⑤住民の役割の周知と実践者の組織化

新しい形の防災活動を体験してもらうことで、地域住民それぞれの役割が見えてくる。その役割を可視化し、新たな参加者を獲得するためのツールとし周知を行う。

実践者の組織化に関しては、当団体を中心となり組織化を図るが、多様な地域住民の参画によってバトンを渡し、地域住民が主体的に運営できる組織作りを行う。その際は、当団体は伴走型支援に切り替える。

このプラットフォームの活動で、防災をとおして地域住民が共通の課題解決に取り組み、地域力の向上と、いつ来るともわからない災害への備えができ、地域共生社会への一歩となると考えている。